



▲伝授さんの自宅にて。「以前描いた絵も見ているうちに手を入れたくなってしまいました(笑)」

約四十年前から独自の作風と世界観をもって絵画を描き続けている長折字道久内在住の画家、菅野伝授さん宅を訪問。絵を描き始めたきっかけや今までの軌跡、地元との関わり等についてお話をうかがいました。

「岩代の森の静けさがふるさとの原風景。この場所ので呼吸するように描くことが自然な毎日です」
～菅野(すげの) 伝授さん

かわら版

～集落支援員だより

Q 作品世界と自然について
農家の長男として農業やシイタケ栽培をしていた時期もあり、岩代の森や林をモチーフにした作品を描くことが多いです。森の中で地面に寝転がっているとコケや植物の美しさに魅せられ、静寂の世界に包まれます。
若い頃、ヒッチハイクをして旅をした経験も懐かしい心象風景になっていきます。明るい色彩の世界とモノクロの世界を描くことがありますが、どちらも自分の作品を見て、生命あるも

Q 絵を始めたきっかけは？
高校生のとき美術の先生の油絵を眺めていたら「描いてみっか」と絵の具を分けて頂いたのがきっかけです。
成人後、ある絵描きさんから「基礎をやった方がいい」とアドバイスされ、講談社の通信教育を受講。二年後にコンテストで大賞を受賞しました。



菅野伝授さんの
受賞歴 & 画集を紹介します!

伝授さんの絵は日本だけでなく世界でも高く評価され、画集や挿絵を描いた本もあります。

- <主な受賞歴>
- ★1980年：KFSアートコンテスト大賞受賞
 - ★1984年：童画グランプリ講談社児童局賞受賞
 - ★2001年：リキテックス・ビエンナーレ特別賞
 - ★2004年：NASU国際ビエンナーレ国際交流賞
→ニューヨークにて招待展
 - ★2005年：第1回世界堂絵画大賞展協賛賞
 - ★2006年：花の美術大賞展国際花と緑の博覧会記念協会賞
 - ★2012年：東京展優秀賞
 - ★2018年：東京展グルグルハウス賞
喜多方市美術館2018公募ふるさとの風景展奨励賞 ほか

Q 地元との関わりについて
絵を通して様々な人との出会いがあり、後押しされてきました。約三十年前に、自宅の蔵を開き、放して私の作品を集めた美術館を開設して下さった方もあり、励まされました。また数年前から同じ自治会のご夫婦は二年に一度、自宅を開放して個展を開催して下さっています(三年前からコロナ禍で開催を見合わせ)。

のすべてへの愛を感じて下さる人がいたり、思いもよらない見方をして下さる人もいて興味深く感じています。

▼下長折の渡辺文男さんの依頼で描いた看板用の作品。今も渡辺さん宅に飾られています

和産ワインのラベルに絵を依頼されたのも嬉しかったです。市内をはじめ県内のカフェなど何か所かでは私の作品を飾り、個展を開いたり、絵のポストカードを販売してくれています。私にとって描くことは生活の一部で、風呂上がりの一杯という感覚で絵筆をとるのが日々の楽しみになっています。これからも出会いやご縁を大切にしながら、静かに淡々と描いていきたいと思っています。



- ★主な画集や書籍★
- *『森ニテ』(2008年：画集)
 - *『芽刈り狐』(2008年：挿絵)
 - *『はらかな風景と花々』(2012年：画集)
 - *『ふくしまで、オレは農業をやる』(2017年：挿絵)
 - *『カゲ画集』(2019年：画集)

令和4年度岩代公民館市民講座&岩代支所集落支援協働補助金事業 ～歴史街道「塩の道」を往く～が開催されました

去る九月三十日、歴史街道「塩の道」を巡る市民講座が開催され、二十九名が参加しました。

午前の座学は岩代公民館主催で行われ、二本松市文化財保護審議会委員の高橋正弘氏が講師を担当。約三十年前にテレビで特集された「塩の道」の番組上映も行われました。



午後は「岩代小浜の歴史と文化を護る会」の主催により、バスで現地に出かけ、遺跡や道標を確認しながら塩の道をたどりました。皆さん、歴史好きならではの熱心な様子でした。

<本陣跡>

▲大名や御つきの人が泊まったとされる本陣。屋根裏には「見ると目がつぶれる」と言われるものが今も保管されているそうです。午前の講義で講師の高橋さんが説明してくれました



POINT① 山木屋方面

最初に向かったのは川俣町山木屋方面。かつて相馬～二本松をつなぐ重要なルートになっていたそうです。

<問屋前の道標>



POINT② 白髭宿

当時、宿場町として栄えた白髭宿はじっくり歩いて見学しました。古い蔵が残り、往時の面影を残す形で改装された家もありました。



<八坂神社>



▲山木屋から東和に向かう途中にある八坂神社。400年以上の古い歴史ある神社で、石にまつわる不思議な伝説が語り継がれ、石供養塔が祀られています

<夏刈の二十三夜塔>



▲白髭宿の入り口には白髭宿の看板があり、案内図が描かれています。ここでバスを降りて散策を楽しみました

▲白髭から夏刈に向かう途中にある二十三夜塔。女性たちが集まってお月見をしたといわれています

▲山木屋の交差点にある道標&供養塔。かなり大きな石に文字が刻まれています。約280年前、信州の高遠から石工職人を招いて彫られたものと伝えられています

POINT④ 小浜～柏木田～大柱方面

子守唄にも歌われるほど栄えた小浜を通り、柏木田から大柱方面へ。当時の道は誰も通らない山道になっていますが、その入り口と出口を案内しました。



▲大柱の出口付近。塩の道は交差点を荒井方面へ向かい供中大橋へ続きます

POINT③ 梅沢の尾根道

白髭宿から存仮に抜けるルートには見晴らしのよい尾根道があります。

<梅沢の供養塔>

▲梅沢の山桜が見える道沿いには供養塔が並んでいます。桜の季節に訪れたい場所です



岩代の歴史シリーズ

「渡邊閑哉と安積疏水」

③

藩政時代の二本松藩領域は、安達、安積の二〇か村であった。郡山の大部分は二本松藩領であった。

安積の広大な地は、日本海から吹く風が奥羽山脈を通る際冷やされ、さらに猪苗代湖上空でも冷やされ吹き込むため寒く、また水源が少なく常に水不足であったため、耕地に適さず、原野が多く薪や牛馬の秣場(まぐさ場)に使われていた。

閑哉は、アヘン戦争での清国敗戦の報に接し、この地を耕地として活用し、食糧増産及び兵備の充実による国力増強をすべきとの思いから、安積三原(大槻原・大壇原・対面原)の開拓を唱え、第一回目の現地踏査をする。慶応四(1868)年、一月、鳥羽・伏見の戦いが始まり、国内は、戊辰戦争に突入した。

同年七月、二本松城、同九月、会津若松城が落城して戊辰戦争がほぼ終結、明治の世に改まり、新政府は廃藩置県・廃刀令・四民平等などの法を示した。藩政時代、猪苗代湖は会津藩の領地であったため、湖水の水を他藩で活用することはできなかったが、明治政府が成立して分水も可能になってきたのである。